

CULTURE

第22回

『西脇順三郎詩集』

西脇順三郎は1894年に新潟県小千谷市(現小千谷市)で生まれた。画家を志して上京後、萩原朔太郎やヨーロッパのシュールレアリスム運動に触れ、本格的に詩作を始めた。39歳の時の『ambarvalia (アマバルヴァリア)』に始まり、生涯に14冊の日本語詩集を刊行した。岩波文庫の『西脇順三郎詩集』(那珂太郎編)には、『旅人かへらす』『第三の神話』『えたるにたす』などから、初期から晩年までの代表作が収録されている。

あらすじ

案内人

大野裕之さん



おおの・ひろゆき 脚本家、プロデューサー。1974年、大阪府生まれ。京都大大学院博士課程単位取得。『チャップリンとヒトラー』でサントリ一学芸賞。著書に『京都のおねだん』。

詩作に加え、詩論や英国の詩人エリオットの翻訳など、多彩な仕事を残した西脇順三郎(1894〜1982年)。ノーベル文学賞候補になったことも知られる詩人の生地、新潟県小千谷市を大野裕之さんが訪ねた。

文学逍遥



異質なものにぶつかった魂



山本山の展望台に立つ大野裕之さん。信濃川を見下ろす眺めを西脇順三郎も愛したという新潟県小千谷市で



現代詩の巨人・西脇順三郎がノーベル文学賞の候補だったと聞いても何の異論もなかった。たがえば日本人初の受賞者の川端康成が翻訳可能なまでの日本語の美の極北であるのに対して、現念の難別に見られる西脇の詩は、西脇は意味によって程よく耕された言語世界の向こう側の「荒地」の住人というべきか。ゴツゴツした石礫がぶつかり合って火花を散らすように、意味も無意味もない言葉たちが恐るべき速度でぶつかりあって新たな価値の閃光を放つ。地域性を匂わせないモダンなスタイルを、逆に故郷を訪ねてみたくなかった。西脇は1894年に現在の新潟県小千谷市で生まれた。信濃川の水運に恵まれ、縮緬で来た豪商たちが軒を並べた繁華が、街の中心に、西脇本家の広大な

記者雑感

西脇の詩は難解と言われる。時間も空間も飛び越える奔放なイメージの連なりに故郷の直接的な描写はほとんどないが、新潟県小千谷市を訪れ、ここで詩人が育ったことが不思議と納得できた。「愚ぶ会」の小見山昭事務局長は「旅人」という詩に登場する「郷里の崖」が地元で「深地の崖」と呼ばれる崖だと教えてくれた。「西脇の詩は想像力だけで書いたのではなく、一つ一つの情景に裏付けがある」という。西脇の詩には植物の名前や自然の描写が度々登場する。その原風景を目にし、難解な詩は親密で身近なものに変わった。【岡雄輔】



小千谷市立図書館内にある西脇順三郎記念室。西脇の蔵書と絵画、原稿などが展示されている。いずれも関連撮影

郷 里を逃れて東京に 出たが、父の死と ともに画家の道は 諦めた。本論を全文ラテ ン語で書いて提出するとい う、才気走った言語学研 究者としてイギリスに留学 したのは1933年、28歳 の時のこと。当時のイキリ スは、T・S・エリオット らが主導するモダニズムの 最前線だった。自作の詩 がエリオットと同じ雑誌に 載ったことで西脇は大いに 自信を得て、英文詩集を出 版。帰国してイギリスの 最先端の芸術運動の紹介に 力を尽くす。詩論・文学論 を次々と発表し研究を重ね た上で、39歳になって詩集 『ambarvalia』 で文名を上げた。 その後、戦中は故郷に疎 開し、日本の古典文学に沈 潜した。故郷を捨てたイキ リスカぶれがルーツに回帰 したのか。ただ、戦後す ぐに発表した『旅人かへら す』の「永劫」へと広がる 世界を見る限り、むしろイ キリスでも日本でもない無 限の時空にさまよっていた と言へきだろう。戦中に10 年間作品を発表せず沈黙に 徹したのは、詩人の抵抗だ った。

山 からの下りて、西脇 が「郷里の崖を祝 福せよ」と詠んだ 崖を訪れた。大きく蛇行し た信濃川が急流になって絶 壁にぶつかる場所だ。西脇 は近くの病院でこの風景を 見ながら最期を迎えたとわ けだが、大きく弧を描く流れ にならなくて、「彼は晩年 故郷へ回帰した」とどこぞ 定調的なストーリーは言っ ない。西脇にせよ、エリオ ットにせよ、故郷に深く根 ざし、同時にそこから逃れ 異質なものにぶつかりあう ことで、新しい地平に価値 を生んだ。あの過激な魂は 祝福すべき崖にぶつかって 永遠になったのだ。そして 彼の言葉たちは、急流のご とく私たちの感性の地層を えへり続ける。

次回は2月1日掲載。 松田青子さんが案内します。